

【書 評】

岸政彦『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』

2013,ナカニシヤ出版。(448 頁)

評 者 加藤 倫子

本書は「民族的アイデンティティの歴史的な構築」のなかでも、とりわけ沖縄と本土の関係における「同化を通じた他者化」をテーマとし、戦後の沖縄的なアイデンティティとは何なのかを明らかにしている。「沖縄と本土」という関係を軸に広く「自己と他者」の関係性、あるいは本書に沿って言うなら、その非対称性についての社会学的研究だと言えるだろう。本書の内容を章ごとに紹介していこう。

まずは序章「オキナワから来た少年」である。ここでは、本書のテーマ、目的、仮説、概要が簡潔に示されている。本章で注目すべきは、そのタイトルでもある「オキナワから来た少年」の話である。当時の新聞記事を元に、沖縄の少年・大城勲が本土に招かれ、各地をまわったという「本土の体験記」が再構成されている。なぜ本書の入り口である序章で、この「体験記」が示されたのか。そして、この少年が大人になり、どうなっていったのか。大城少年にとって「本土の体験」がどのような意味を持ったのか。それらはあとになって明らかになってくる。

第1章「戦後沖縄の経済成長と労働力流出」では、各種統計データを用いながら、戦後の沖縄県における人口移動と経済成長についての概略とその社会的・経済的背景が丹念に描き出されている。いうまでもなく沖縄の社会・経済は米軍の占領や基地政策の影響ぬきには考えられない。占領期初期、米軍によって基地建設のために農地が接収され、土地を失った農民たちはサービス産業従事者として都市部に移動していく。これが端緒となり、1960年代の沖縄は本土同様に高度経済成長期を迎える。その要因は基地経済や日米からの援助といった「外生的条件への依存」というよりも、実のところは、個人消費支出と民間投資部門の伸びという内在的なものだったという。「旺盛な消費」、「活発な設備投資」、「労働市場の逼迫」という循環により「完全雇用」が生まれ、さらなる都市部への人口集中、消費ブームといったかたちで60年代の沖縄の成長サイクルが成立していくが、人口増加と人口集中は次第に緩やかとなり、復帰を境にストップしていく。本書のテーマである「本土就職」が本格化したのもちょうど同じ頃である。公的ルートによる出入域は1957年ごろから増え始め、「60年代後半から復帰の72年にかけて、加速度的に増加し」、「移動する沖縄」が形成されていく(pp.69-71)。また、この頃の出入域者数の推移を見てみると、すでに「Uターン型移動」のパターンが確立されていることもわかる。さらに、職安によるデータを参照してみると、60年代から80年代はじめまでは高校を新規に卒業した若年労働者たちが常雇いの就職によって本土に移動する「新卒ー常雇い型」によって特徴づけられており、80年代半ばからは次第に「新卒ー常雇い型」が減り「一般ー出稼ぎ型」の本土移動が増えていることが明らかになる。この変化は「本土移動のリピーター化と常態化が反映されている」のだが、そもそもの出発点である「新卒ー常雇い型」の本土就職は「体系的に沖縄の若年労働者を本土へ送り出すひとつのまとまったシステム」として琉球政府職

安・県内教育機関・受け入れ先本土企業などが一体となって構築したものだった。一方、従来の沖縄研究で指摘されてきた「沖縄の貧しさが労働力の流出を促した」という図式とは異なり、60年代の沖縄は活況を呈しており著しい「近代化」を経験していた様子が浮かび上がってくる（pp.90-1）。著者は、好況のさなかの本土移動を、経済的要因に還元できない「過剰移動」と呼び、当時なぜこの「過剰移動」が生じたのかと問うている。

第2章「本土就職者たちの生活史」では、前章で確認した「送り出しシステム」を実際に経験した7名がみずからの「本土就職経験」について語る。しかし、その語りは「本土就職経験」の話にとどまらず、話題は多岐にわたる。たとえば、方言の話、家族・親戚についての話、音楽の話、沖縄の自然が美しいという話……。7名それぞれの過去の生活と彼・彼女たちの人となりゆたかに描き出されている。だが、7名に対する聞き取りは別々の場所でおこなっていて、それぞれの人たちがまったく異なるライフヒストリーをたどっているにもかかわらず、「あこがれを抱いて本土に渡った」「本土と沖縄のちがひ」「本土での生活は楽しかった」「本土における沖縄文化への接触」といった同じ内容の語りを含んでいるのである。

こうした同質的な語りは、第3章「ノスタルジックな語り」において分析枠組みのキーとなってくる。ノスタルジックな語りとは、語っている時点（現在）の場所は沖縄で、生活史（過去）として語られているのは沖縄から大阪や東京へ渡った話だという空間的・時間的に複雑な構造のもとで生まれた「懐かしい望郷」の語りである。その構成要素は、①出発前の本土に対する「あこがれの祖国」というイメージ、②本土社会の「楽しさ」、③移動先における「沖縄的なものの再構築」としての望郷の語りの3点である。このような枠組みをたずさえて再度生活史を振り返ってみると、まるで「本土への旅は沖縄人にとって、やがて沖縄へ帰るための旅だったのではないかと思えてくる」（p.263）。ところで、生活史における「定型的な語り」は従来の社会学の方法論（なかでも構築主義生活史法）では「権力」によって一方的につくられるものとされ、分析対象の中心からは斥けられてきた。構築主義生活史法は定型化できない「余剰物」としての語り（それは沈黙や笑いといった「語り」以外の余剰物も含む）に価値をおき、それを支配的で抑圧的なマスター・ナラティブやモデルストーリーに対する抵抗として捉えてきたのである。しかし、著者はこれに対して批判を展開する。たとえば、「いかに近代的な物語であっても、それ（引用者注：定型的な語り）はわれわれ生活者によって欲望され、習得され、新しくつくりかえられ、つねに語られ続けているのである。……語りに対して権力はもっと複雑なかたちで作用するし、抵抗のあり方ももっと複雑である」（p.276）。さらに著者は、このような定型的な語りが生み出される過程に目を向け、「語り」と「経験」の対応のさせ方や語りの「事実性」（語りの「真理値」）をいかに扱うかを検討している。この「事実性」について、生活史法のふたつの立場（「素朴実証主義」と「構築主義生活史法」）は、前者は「真実でない限り分析から排除する」というやり方、後者は『なにを語ったか』ではなく『どう語られたか』ということに着目することで『真理値』を空白のままにしておく」というやり方で対処しようとする。しかし著者は「語りに対して誠実な態度で臨む、ということは、それが真であれ偽であれ、現実になんらかのかたちで関係し、『ほんとうのこと』あるいはそうでない場合は『間違ったこと、偽りであること』としてあつかう、ということである」（p.283）として、いずれの方法にも距離をおく。そうして生活史における定型的な語りを「繫留点」と

名付け、それが多様な語りを集めることでしか到達できない、否定的にしか姿をみせないものと定義する。あらためて7名の生活史を振り返ると、沖縄に対してありがちなカテゴリー化を拒否する語りが散見されたにもかかわらず、結果的にノスタルジックな語りが典型的にあらわれていることが確認される。そして、ノスタルジックな語りは「あこがれとともに始まった同化主義的な移動が、大規模なUターンへと、つまり『他者化』へとつながっていったことを」示すものとして重要な位置づけを与えられている (p.289)。本章の最後では、「過去から直接に継承されるわけでもなく、また差別や暴力への抵抗から政治的に動員されるわけでもなく、むしろ文化的にはきわめて同化主義的な労働力移動が、なぜ大規模なUターンという運動を生んでいったのか」という第1章の最後で提示された問いが再びあらわれ、次章に引き継がれていく。

第4章「本土就職とはなにか」では、本土移動の制度化や「本土送り出しシステム」の様相をさまざまな歴史的資料や報道記事から再構成し、「過剰労働」の政治的要因が考察される。第1回目の本土への集団就職は1957年のことである。人数にして122名という少なさだったが、琉球政府の一大プロジェクトとして位置づけられ、送り出される側に「先方隊としての覚悟」が要求されるなど、「悲壮感」の滲むものだったようである。というのも当時、琉球政府スタッフは戦後のベビーブームによる若年人口の激増を不安視しており、増加した人口を本土就職というかたちで吸収させることでこの不安を解消しようとしていた。しかし、本土就職の希望者は多くなかった。当時のデータを見てみれば人口数に見合わない求人数だったことが要因だとわかるが、琉球政府のスタッフは「無知や偏見や根拠のない不安感・恐怖感からくる、非合理的な、それゆえ矯正が必要な沖縄の人びとの態度のあらわれ」(p.302)として捉えていたという。高度成長期を迎えていた日本側にとっても安価で働く労働力の移動への関心は高く、沖縄側と日本側との折衝によって送金等の様々な制度は整っていったが、回を重ねても充足率はなかなか上がらなかった。ところで、このシステムは、当時の米民政府や米軍の土地接收への反対運動である「島ぐるみ闘争」や「復帰運動」と無関係ではなかったようである。「復帰運動の思想は、米軍による支配を『異民族支配』として捉え、復帰の根拠を『同じ日本民族であること』に求めていった」(p.324)。それゆえ、日本本土は沖縄人にとって「母なる祖国」「解放を約束する地」と見なされていた。その意味で、本土就職は日本と一体化するための好機であったが、皮肉にもここで障害となったのは沖縄の人びとの前近代性ともいえるべき「沖縄らしさ」だった。ここに矛盾するふたつの課題が見いだされる。その課題とは、本土就職を促進することと求職者の素質を見極め選別することである。これらを同時に達成するために「近代的＝合理的な労働者」として送り出される青少年たちを根本からつくりかえる必要があったのである。このことをよく示す事例が次に見る本土就職者向けの「合宿訓練」である。当時本土にわたった沖縄出身者が不適応を起こして自殺や犯罪・非行に向かうことがあり、それは沖縄の政治家や行政、マスメディアによって深刻な「社会問題」として捉えられていた。しかし、それらはあくまでも個人が克服すべき心理的な問題であるとして日本社会への順応が求められ続けた。日本社会に順応するためのふるまいや心構えを身につけるのがこの合宿訓練の目的なのだが、この合宿訓練を通じて要求されていたことは「真面目に働くこと、労働条件の厳しさに根をあげないこと、規律を守ることと同時に、沖縄文化を体得し、本土人にそれをアピールすること、沖縄に関する知識を貯え、他府県人に対して沖縄がどうい

場所なのか説明できるようになること」(p.346)、すなわち「沖縄人」でありながら日本的な労働者の身体を獲得することであった。こうして沖縄人の身体はたえざる「お前は誰だ?」という自己言及的な監視の視線にさらされることになり、「他者性」の感覚が生み出されたのではないかと著者は指摘する。復帰後には、本土移動はよりカジュアルなたちで実現されるようになったが、各種データが示しているのは、沖縄の若者たちの地元志向やUターン志向が強いということである。この背景にあるのは差別体験や労働条件の問題ではない。このように過剰にとどまる・還流する事態は県内失業率を押し上げる要因として懸念されているが、「生活資源において相対的に制限されている沖縄社会のなかで暮らしていくときに、こうした沖縄的アイデンティティや沖縄的生活様式は非常に有用な資源となるだろうし、その意味ではむしろこうした『過剰な還流』は、『経済学的には非合理的だが社会学的には合理的』なのだろう」(p.378)と著者は分析する。

本書のタイトルを冠した結論のこの章で、著者は、あからさまな差別や厳しい労働環境以上に本土就職の経験者が語った「本土での生活は楽しかったがUターンする」という「ノスタルジックな語り」こそが、『差別』という言葉では捉えきれないほどの大きな亀裂があること」を示していると述べる。沖縄と日本——この、マイノリティとマジョリティの関係は社会的・歴史的「必然」によってつくられた非対称な関係である。「マイノリティであるということは、果てしない自己への問いかけという『アイデンティティの状態』にあるということである」(p.401)のに対し、マジョリティは同じ問いかけ、つまり「自分自身を直接見ること」を免除されている。歴史的「悲劇」が引き起こす悲しみや贖罪意識、善意にもとづく同化圧力は、自己の源泉を忘却させ、われわれとかれらがどれくらい違うものか、どれくらい同じになったのか判定することを迫る。こうして同化は他者化として機能してしまう。著者ははっきりと「民族的同化は、同化圧力のもとでは、不可能であるだろう」と述べている(p.420)。

結論の最後には、序章に登場した「大城少年」がふたたび登場する。46年の時を経た新聞記事のなかで、大城は復帰以前の渡航に関する資料を寄贈、この資料について「思い出や怒りが詰まっている貴重な資料です」(p.422)と述べている。この発言についての詳細は描かれておらず、著者もこの発言に対して「どのような意味が込められているのだろうか」と読者に推察を委ねているが、すべてを読み通してのこの大城の語りの内実は察するに余り有るものがある。著者のつとめて平静な筆致も手伝って、読み進めるうちにマイノリティとマジョリティの非対称な関係性における「残忍な優しさ」のもつ暴力性に打ちひしがれてしまうだろう。

本書は扱われているテーマについての議論はもちろんのこと、社会学における質的研究の従来の方法論上の問題点を克服しようという試みとしても(語りの「事実性」の位置づけについて問うた点でも)一定程度成功をおさめていると言えよう。「語りに対して誠実な態度で臨む」とはどのようなことなのかをあらためて問い、「語り」に偏りすぎないことを主張している点は、ライフストーリー法をはじめ「語り」を中心に展開される研究に再考を促すものとして受け止めた。最後になるが、「民族的同化は、同化圧力のもとでは、不可能であるだろう」という著者の結論は、昨今さまざまな差別が噴出する状況を前に、「同化とはなにか?」「そもそも同化は必要なのか?」という問いに変換されて、私たち一人ひとりに突きつけられていると言えよう。